

基礎的な音楽的技能の効果的な指導法

－ 3年間継続した発声指導の効果の検証－

松前良昌・濱本恵康*・三村真弓*

要約：音楽科授業において、よりよい表現を求め、自分の思いが表現できたと感じさせるためには、基礎的な音楽的技能を身につけることが重要である。そのため、効果的に技能を向上させる指導法の開発が必要とされる。なかでも、生徒にわかりやすい発声の指導法の開発が重要である。そこで、手などの動作を取り入れた発声指導や、比喩的表現を用いたキーワードによる発声指導等の効果の検証に焦点化し、継続して研究を推進している。

今年度の研究では、手などの動作を取り入れた発声指導や、比喩的表現を用いたキーワードによる発声指導などを継続することは、生徒が発声方法を体得するのに効果的であるとともに、指導を3年間継続することによって定着し、知識としての理解にもつながるという結論を得た。

キーワード：発声指導、動作、発声、比喩的表現

I. はじめに

本校では、「小・中学校9年間の学びがつながる授業づくりのあり方」というテーマのもとで、小学校から中学校への学びや育ちの円滑な移行という課題に応え、子どもたちの学びの質が高まるためにどのような授業づくりを進めるのかを研究をしている。ここで言う「学び」とは生涯通して行われるものと捉え、学びの連続性を重視している。これは音楽科の目標である「音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度を育てる」(学習指導要領1学年)、「生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる」(学習指導要領2・3学年)とも通じている。そして、小学校5・6学年および中学校1学年であるⅡ期(本校研究主題参照)においては、いわゆる中1ギャップの軽減も含めた授業展開に焦点をあてて研究を推進することにした。また、中学校2・3学年であるⅢ期においては、「概念の深化をめざした授業構成と教材の工夫」に焦点をあて、思考力・判断力・表現力といった高次の学力を育成する授業づくりというテーマで研究を推進している。

音楽科で学習したことを社会や生活に直接的に活かすことができた実感するのは容易ではない。しかし、そのことは生涯にわたって豊かに人生を送るうえで有意義なことである。だからこそ、よりよい表現を求め、自分の思いが表現できたと感じさせることが不可欠と考えている。その基本的要件として

音楽的技能を身につけることは重要である。

Phillips(吉富ほか訳, 2007)は、「優れた歌唱のための基礎的なスキルが思春期以前に確立されていなかったら、声の開発に関する教育プログラムを第7学年(およそ中学1年)で始めるべきである。」と述べている。したがって、短時間で効果的に技能が向上する指導法を開発すれば、授業時間数が少ない中で、音楽的技能を用いてよりよい表現ができたとの実感や達成感をより多くもたせることが出来ると考えられる。

そこで、本校音楽科においては、合唱における高次の学力を育成する授業づくりをねらいとし、さらに基礎的な音楽的技能を身につけさせることに視点を置いて、Ⅱ期・Ⅲ期の両方の段階に通ずる授業構成と教材の工夫について、基礎研究をすすめている。

II. 研究の目的

合唱をつくりあげていくということは、作品に込められた作詩・作曲者の思いを汲み取り、自分なりに解釈し、歌声にして表現するということである。この合唱をつくりあげていく一連の学習過程においては、思考力・判断力・表現力のような高次の学力が不可欠である。また、さらに言えば、合唱をはじめとする音楽活動にゴールはない。求める理想像は考えられるが、もし、その理想像に到達したとしても、さらに高次の理想像が見えてくる。つまり、深

* 広島大学大学院教育学研究科

化すればするほど、さらに高い目標が現れるのである。言い換えれば、正しい音程・リズムや言葉の意味を伝えやすい発音などの具体的な目標から、楽曲の深層に潜む作曲者の心理を解釈して表現するなどの抽象的な目標へと、次第に求める理想像は高次元になっていくのである。加えて、論理的に説明しきれない、もしくは理論を超えた部分や、言葉だけでは表現できない部分を表出することもある。そのような点からすれば、音楽が生徒に与える影響は計り知れないといえることができる。

そのために、よりよい合唱表現を求めていくための基本的要件として、音楽的技能を身につけることが重要となってくる。いくら自分の思いや高い目標をもったとしても、それを表すための音楽的技能がなければ、表現の広がりや深まりは期待できない。生徒自身にも手応えが感じられず、向上心の高まりも期待できない。したがって、Ⅱ期では何のために音楽的技能を身につけようとしているのかを理解させるとともに、その音楽的技能を用いてよりよい表現ができたとの実感や達成感をもたせる必要があると考えられる。また、Ⅲ期では、身につけた音楽的技能を曲のどの部分でどう利用するかを自ら考え、判断し、表現に活かすことができるようにしていくことが必要と考えられる。ただし、そのことは音楽的技能を身につけることを偏重することを意味していない。必要なのは、年間カリキュラム上からも限られた時間内で効果的に音楽的技能が向上する指導法の開発である。

そこで、本研究においては、今年度、これまで筆者の経験から利用してきた様々な3年間継続した発声指導をすることによって、どのくらい生徒に発声方法が定着してきているかを検証する。



図1 合唱コンクールの様子

Ⅲ. 研究の経緯

本校音楽科では、2008年度から合唱の指導法開発に研究の中心をおいている。中でも「基礎的な技能を身に付けさせるとともに、その必要性を理解させる」ことに重点をおき、合唱の授業における効果的な音取り練習方法の開発に焦点化して研究を推進している。

2010年度は、正しい音程で歌うのが比較的苦手な生徒数人に聞き取り調査をした。その結果、「自分の声がわからない」「正しい音程がわからない」などの回答を得た。そこで、自分の声で自分自身にしっかり聴こえれば正確な音程で歌えるのではないかという仮説をたて、周波数解析およびアンケート調査を用いて調査・研究を行った。その結果、自分自身の声を聴くために、手を耳にあてる方法が有効であるとの結果を得ることができた。

2011年度からは、周波数解析ソフトと生徒アンケートを用いて、「比喩的表現を用いたキーワードによる発声指導」の効果を検証することとした。ただし、本校では、発声については高度なものを指導するのではなく、基本的な内容を指導している。口の中のことをあまり細かく指導すると、そのことを気にするあまり、呼吸が浅くなる傾向が見られたからである。そのため、呼吸法を中心に指導している。

その比喩的表現を用いたキーワードの内容と実際のねらいを例にあげると、「内蔵を下げる」は「横隔膜を意識させる」、「レモンが縦に1個入るようする」は「軟口蓋を上げる」などである。

この方法は、筆者が一般の合唱団において東京混声合唱団桂冠指揮者である田中信昭氏による合唱指導を受けた際に提案された方法をもとに、中学生向けに言い換えたものである。これらの内容を繰り返し継続して指導することによって、経験上、生徒は合唱に合う自然な発声に近づいてくるのである。

本校では10月下旬に合唱コンクールを開催している。そこで、音楽科ではカリキュラムを調整し、9～10月に合唱の授業を集中して取り入れ、各クラスが発表する曲を練習している。そのパート練習や全体練習の中で、正しい発声で歌えるようにするために、比喩的表現を用いた指導を取り入れた。そして、その約2ヶ月後の12月下旬に、指導効果の検証のために調査を行ったところ、一定の効果があるという結果を得た。

そこで、今年度の研究では、比喩的表現を用いたキ



図2 合唱練習の様子

ワードによる発声指導をはじめとする様々な3年間継続した歌唱指導をすることによって、どれくらい生徒に発声方法が定着してきているかを検証することにした。

IV. 調査

1 調査時期および対象生徒

先に述べたとおり、本校では毎年10月下旬に合唱コンクール(図1)を開催していることから、音楽科ではカリキュラムを調整し、9~10月に合唱授業(図2)を集中して取り入れ、各クラスが発表する曲を練習している。そのパート練習や全体練習の中で、正しい発声で歌えるようにするために、比喩的表現を用いたキーワードによる発声指導等を取り入れた。

そこで、2012年度の第1学年と、2014年度の第3学年、つまり同じ生徒集団を対象に、合唱コンクールの約2ヶ月後に、指導効果の検証のためにアンケート調査を行った。

2 アンケート内容

様々な発声方法が生徒に定着しているかを明らかに

するため、記述式のアンケート調査を実施した。アンケート内容は、1年・3年のどちらの時期も同じ内容とし、比較できるようにした。(表1)

アンケートは指導した内容ごとに、大きく4つに分けた。1は手などの動作を取り入れた指導、2は専門用語などを取り入れた指導、3は比喩的表現を取り入れた指導、4は歌声をイメージさせるような指導に関するものである。これらについて、「わかりやすい」「どちらかと言えばわかりやすい」「どちらかと言えばわかりにくい」「わかりにくい」の4段階で回答させた。

表1 生徒アンケート

◆次の合唱の歌声をより美しくするための様々な方法や言い方はわかりやすいですか？

1. 手などの動作を取り入れた指導全般
・両手を上下にひっぱって伸ばすような動作
・両手を斜め下に広げるような動作
・片手を鼻の前で水平にする動作(アイーン)
・片手を耳に添える動作
2. 専門用語などを取り入れた指導全般
・腹式呼吸
・横隔膜を下げる
・軟口蓋を上げる
・のどと口の間をあける
・子音をハッキリ言う
3. 比喩的表現を取り入れた指導全般
・内臓を下げる
・気管支ををペットボトルが入るようにする
・口の中をレモンが縦に1個入るようにする
・あくびの2秒前みたいにする
・おなかの底から息を大きなポンプで送るようにする
・「か」は「KKKA」みたいに言う
4. 歌声をイメージさせるような指導全般
・オペラ歌手みたいな声で歌う
・ロシア人みたいな声で歌う
・ミゲル君みたいな声で歌う

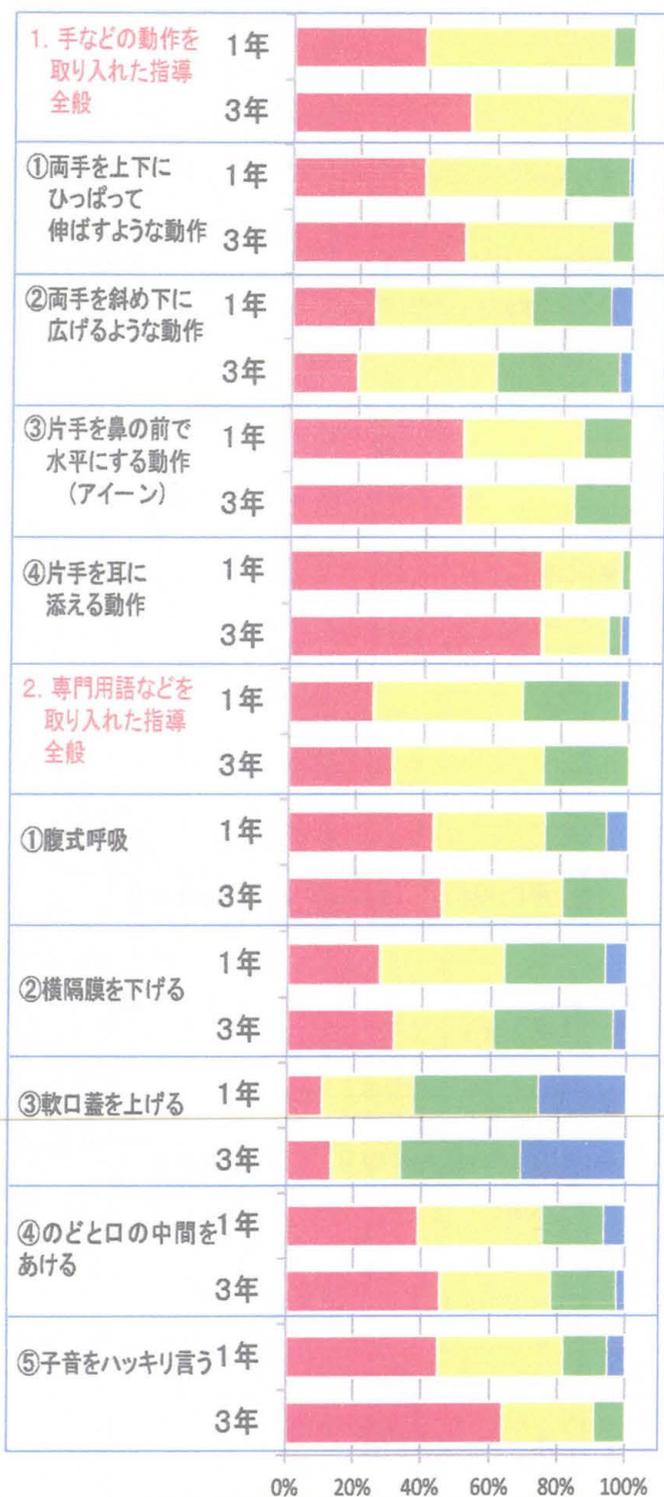
※用紙に記載してある次のいずれかに○印

4：わかりやすい

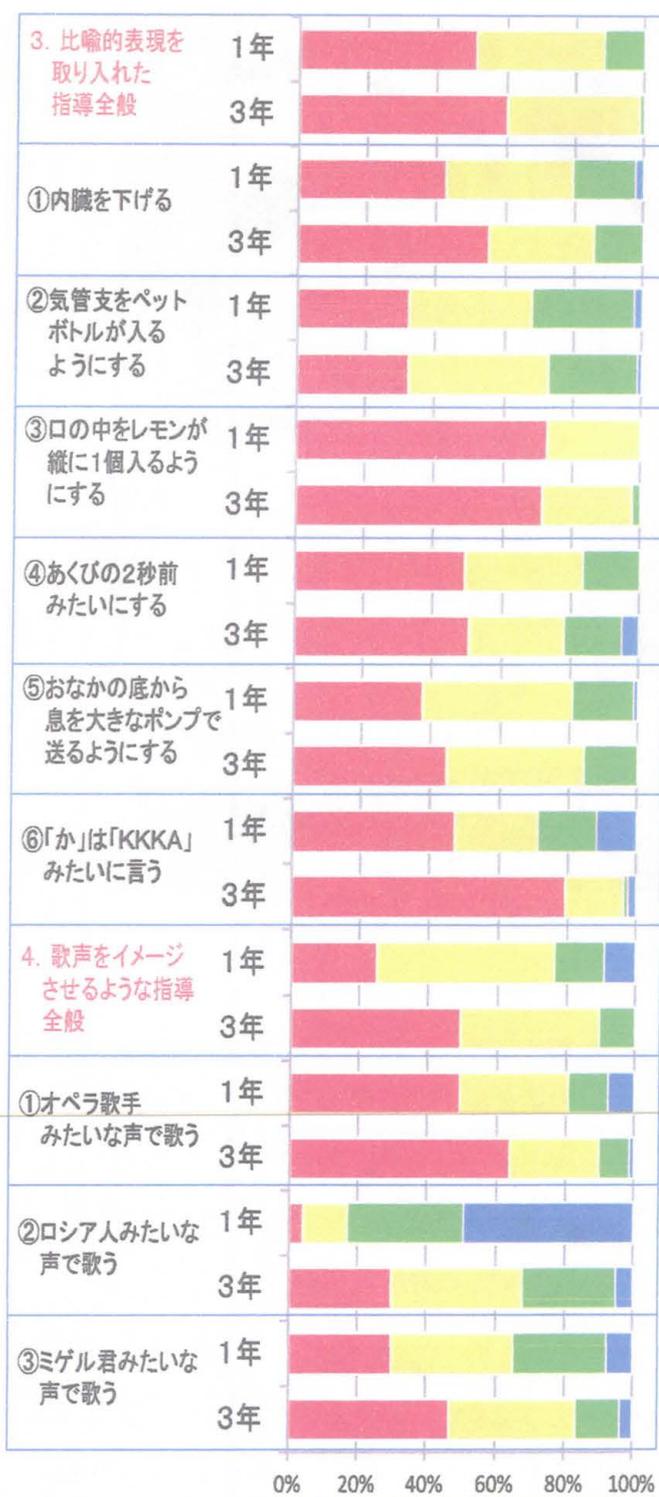
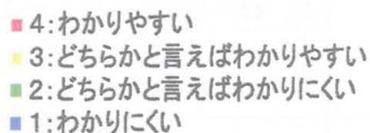
3：どちらかと言えばわかりやすい

2：どちらかと言えばわかりにくい

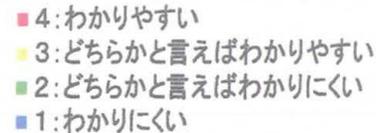
1：わかりにくい



0% 20% 40% 60% 80% 100%



0% 20% 40% 60% 80% 100%



※ 回答人数は1年次は76名、3年次は77名である。質問ごとに、1年と3年を並べている。

図3 生徒アンケート結果

** ミゲル・グレイロ (Miguel Guerreiro)。ポルトガルおよび日本で活動している歌手である。日本では2011年から消臭剤のCMソング等を歌っている。2011年夏には、日本のCM好感度調査で1位となった。

V. 結果・考察

図3はアンケート調査の結果である。アンケート項目ごとに第1学年と第3学年を並べて掲載している。

1 手などの動作を取り入れた指導

第1学年・第3学年ともに、「わかりやすい」か「どちらかと言えばわかりやすい」の肯定的な回答が過半数を上回っている。そして、第1学年からポイントは高いため、第3学年になってさらに高くなることはなかった。これらの結果から、動作を取り入れた指導は、身体感覚でつかんでいくためにイメージしやすく、比較的早い段階から体得しやすいと考えられる。

2 専門用語などを取り入れた指導

最終的には発声に関して一般的によく用いられている発声指導を理解し体得させるために、発達段階に応じて少しずつ専門用語を取り入れた指導を行うようにしている。ただし、本来、横隔膜自体を自分の意識で下げることは出来ず、正確には「横隔膜を下げるように周りの筋肉を動かす」であるが、中学生にわかりやすく「横隔膜を下げる」とした。

また、「軟口蓋」というキーワードは生徒にとって理解が難しいことと予想される。そこで、比喩的表現ではないが、生徒にとって比較的わかりやすいと予想される「のどと口の間を開ける」という言い方についても調査をした。

結果としては、やはり専門用語が難しかったようで、全体的にポイントは高いとは言えない。しかしながら、第1学年より第3学年の方がポイントが高い。発達段階に応じて、次第に理解してきたものと考えられる。

3 比喩的表現を取り入れた指導

第1学年・第3学年ともに、「わかりやすい」か「どちらかと言えばわかりやすい」の肯定的な回答が過半数を上回っている。そして、第1学年からポイントは高いため、第3学年になってさらに高くなることはなかった。これらの結果から、これまでの研究成果と同様に、比喩的表現を取り入れることで、生徒がイメージしやすく、比較的早い段階から体得しやすいと考えられる。

4 歌声をイメージさせるような指導

第1学年よりも第3学年の方が「わかりやすい」か「どちらかと言えばわかりやすい」の肯定的な回答が多い。ただ、個別に見ると、よく使う「オペラ歌手みたいに歌う」はポイントが高いが、「ロシア人みたい

な声で歌う」はポイントは低い。これは、第1学年時の反応から、筆者自身が使わなくなったことも影響している。「ミゲル君みたいな声で歌う」も同様である。

5 アンケート結果の比較

次に、専門用語などを取り入れた指導と比喩的表現を取り入れた指導とを比較してみる。

まず、「横隔膜」という専門用語を用いた指導と、それを比喩的表現にした「内蔵を下げる」との比較である。本来、横隔膜自体を自分の意識で下げることは出来ず、正確には「横隔膜を下げるように周りの筋肉を動かす」であるが、中学生にわかりやすく「横隔膜を下げる」としている。結果は、どちらの時期も専門用語による指導より比喩的表現による指導の方がポイントが高い。また、第1学年より第3学年の方がポイントが高い。初期の指導では、「内蔵を下げる」という言葉に戸惑いをもつ生徒がいたと実感していたが、継続した指導を行うことで次第に理解したためと考えられる。

次に「軟口蓋」という専門用語を用いた指導と、それを比喩的表現にした「口の中をレモンが縦に1個入るようにする」との比較である。ただ、「軟口蓋」というキーワードは生徒にとって理解が難しいことと予想される。そこで、比喩的表現ではないが、生徒にとって比較的わかりやすいと予想される「のどと口の間をあける」という言い方についても調査をした。すると、どちらの学年も「軟口蓋」よりも「のどと口の間」、「のどと口の間」よりも「口の中にレモン」の方が、生徒にとってわかりやすいという結果を得ることが出来た。

そして、「子音をハッキリ」という指導と、それをより具体化した「『か』は『KKKA』みたいに言う」との比較である。結果は、どちらの時期も高いポイントであるが、第1学年では専門用語、第3学年では比喩的表現による指導の方がポイントが高い。これは、実際の授業での反応から推測するに、「子音」という言葉を理解していれば容易に理解できるが、第3学年の方がより表現を工夫しようと考え、細部にわたって具体的な指示を求めるようになったのではないかと考えている。比喩的表現を用いた方が実際にどう歌ったらよいかイメージしやすいからと考えられる。

6 総合的な考察

これらの結果から、これまでと同様に、手などの動

作を取り入れた指導や、比喩的表現を用いた指導は、わかりやすくイメージしやすいと考えている生徒が多く、発声方法の獲得に効果的であると考えられる。

また、継続して発声指導することによって、生徒によりよい発声方法が定着してきている。さらには、発達段階に応じて、少しずつではあるが専門用語による指導と結びついてきているのではないかと考えられる。

これらのことは、筆者が実際に指導している中でも実感している。はじめは、様々な比喩的表現を用いたり、動作を取り入れたりして指導しているが、学年が上がるにつれて、少しずつ専門用語を用いて意味を説明するようにしている。すると、何か一つの比喩的表現を用いたり、時には専門用語だけでの指導をしても声が変わってきた。また、第3学年では、多くを言わなくてもはじめから基礎的な発声法を用いて歌っている。そして、合唱を聴いた他の教員や保護者からも第3学年の合唱について、「3年生になると声が響いている」「大人の合唱団みたい」「表現力がすばらしい」などの言葉をいただいている。

このように、イメージしやすい発声指導をすることは、生徒が発声方法を体得するのに効果的であるとともに、指導を継続することによって定着し、知識としての理解にもつながってくると考えている。

VI. おわりに

これまで、誰もが使える効果的な指導法を開発するために研究を続けてきているが、やはりその時々の生徒の声から即時に状況を判断することが不可欠と考えられる。これは、指導者側に生徒が出した声から状況を判断できるだけの聴く能力が必要であり、言葉で表現するのは非常に難しい。言わば職人芸的な部分が音楽科教育の特性としてあると考えられる。ただし、状況さえ判断できるようになれば、その対策としてどのように指導すればよいかを教授することは可能である。その一つの方法として手などの動作や比喩的表現を用いたキーワードによる指導法があるのである。

今後も、合唱スキルの効果的な指導法を織り交ぜることで技能の向上をめざすとともに、生徒の状況に合わせて発問や指示を工夫することで、よりよい表現をめざして生徒が主体的に技能を活用して歌唱表現できるよう指導法を検討していくことが求めら

れる。

さらには、練習方法や形態の工夫により、生徒の思考力や判断力が求められる場を増やし、他のパートとのかかわりを意識させながら、歌詞の内容や曲想、声部の役割や全体の響きの調和を感じ取らせ、曲にふさわしい豊かな表現ができるような指導法の検討も必要であろう。そのためにも、今後も合唱における効果的な指導法の開発を、実践を通じた研究の中で推進していくことを課題としたい。

引用・参考文献

- 松前良昌・瀧本恵康「生きてはたらく学力を育む音楽科授業の実践Ⅲ－合唱コンクールを活かした合唱授業の実践を通して－」広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第40集，pp. 51-59，2008.
- 松前良昌・瀧本恵康・三村真弓「表現力を支える合唱スキルの効果的な指導法－変声期をむかえた男子生徒の音取り練習方法－」広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第41集，pp. 47-52，2009.
- 松前良昌・瀧本恵康・三村真弓「高次の学力を支える音楽的技能の効果的な指導法－正確な音程で歌えるために、自分自身の声を聴く試みを通して－」広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第42集，pp. 43-51，2010.
- 松前良昌・瀧本恵康・三村真弓「高次の学力を支える音楽的技能の効果的な指導法Ⅱ－正しい発声で歌えるために、比喩的表現を用いた歌唱指導を通して－」広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第43集，pp. 41-49，2011.
- 松前良昌・瀧本恵康・三村真弓「高次の学力を支える音楽的技能の効果的な指導法Ⅲ－比喩的表現を用いたキーワードによる発声指導の実践研究－」広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第44集，pp. 57-66，2012.
- 松前良昌・瀧本恵康・三村真弓「高次の学力を支える音楽的技能の効果的な指導法Ⅳ－比喩的表現を用いたキーワードによる発声指導の効果の検証－」広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第45集，pp. 57-64，2013.
- 三村真弓ほか「中学校・高等学校音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発（2）」広島大

学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 第37号, pp. 99-107, 2009.

三村真弓ほか「中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラムの開発のための基礎的研究(1) -聴取力に着目した音楽科学力調査をとおして-」広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 第39号, pp. 153-158, 2011.

三村真弓ほか「中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラムの開発のための基礎的研究(2) -音楽を感受する能力測定方法の検討-」広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 第40号, p. 165-170, 2012.

文部科学省「中学校学習指導要領」平成20年3月告示,

2008.

岡田陽子他「平成19年度文部科学省 特色ある大学教育プログラム(特色GP)『〈音楽の耳〉トレーニング教育法の開発』-総合的音楽能力育成を目指す教育システムの開発と実践-」エリザベト音楽大学〈音楽の耳〉トレーニング研究所, 2010.

應和恵子・齋藤 祐「声楽表現の理念と技法-歌唱法と発声の観点から-」日本音楽表現学会『音楽表現楽』Vol. 8』, pp. 107, 2010.

Phillips, Kenneth H. (吉富功修ほか訳)『子どもたちへの歌唱指導』より『第4章 子どもと思春期の歌唱』広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要, XIX, pp. 151-163, 2007.

Effective Method for Teaching Basic Musical Skills
- Confirming the Effects of 3-Year Vocal Coaching -

Yoshimasa MATSUMAE, Yoshiyasu HAMAMOTO and Mayumi MIMURA

Abstract. In music classes, it is necessary for students to acquire basic skills so that they can develop the ability to express themselves through music. This demands methods of instruction that allow the effective acquisition of musical skills. In this regard, developing instruction methods for clear vocalization are particularly important. The present study focused on confirming effective vocal coaching methods through the use of hand gestures and figurative key phrases. In the research for this fiscal year, it was concluded that this instruction method for vocal coaching conducted over a 3-year period was an effective way for students to learn vocalization.

Key words: vocal coaching, vocal, figurative key phrases